別紙様式３

平成 20 年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

地域在住の閉じこもり予防該当者に対する作業内容と時間使用の特徴に関する研究
－福島県只見町における調査から－

学位の種類：　修士（作業療法学）
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　作業療法科学系
学修番号　07896601
氏　名：　石橋　裕
（指導教員名：山田　孝　教授）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式１枚（Ａ４版）に収めること

【目的】2006 年度から開始された地域支援事業の介護予防事業では、疾病はなくとも閉じこもりやうつなどの状態であれば，要介護者となる恐れがあるとして介護予防の該当者となった．閉じこもり予防該当者(以下予防該当者)の特徴は，身体的・心理的・社会環境的側面から調査されているが，1 日の作業の内容や時間使用に注目した調査は見あたらない．そこで，本研究では生活機能評価を受診した高齢者を対象に，1 日に行う作業の内容や時間使用，作業に対する自己認識の特徴，身体的・心理的・社会環境的側面や Quality of Life(以下 QOL)を，予防該当群と非該当群との比較から明らかにし，予防該当群に対する作業療法の必要性を検討した．

【対象と方法】 調査は福島県南会津郡只見町で平成 20 年度生活機能評価を受診した 1084 名の中から協力を得ることができた 65 歳以上の高齢者 60(男 17，女 43)名，平均年齢 77.9 ±5.2 歳を対象に平成 20 年 8 月 1 日から 10 月 31 日までの 3 か月間にわたり実施した．

予防該当群と非該当群の分類には，基本チェックリストの外出頻度の質問 16・17 の回答結果を利用した．調査は自宅訪問による個人面接調査方式で行い，質問は年齢・同居家族の有無の他に WHOQOL26，作業質問紙を利用した．分析は質問項目間の差の検定を行い，次に予防該当群の作業の特徴を明らかにするために予防該当群・非該当群を従属変数，5% 水準で有意差がみられた項目を独立変数とするロジスティック回帰分析(変数増加法)を実施した．本研究は首都大学東京研究安全倫理審査委員会の承認(承認番号 08010)を得た．

【結果】 予防該当群と非該当群の年齢，男女比に有意差はなかった．予防該当群は，非該当群より身体的・心理的・環境的側面の QOL が有意に低かった．1 日の作業では，予防該当群と非該当群ともに外出を伴う作業を実施しており，外出に対する満足度には有意差を認めなかった．また，作業の時間使用では，予防該当群はうまく遂行できなかったと感じる作業の時間と休息に該当する作業の時間が非該当群より有意に長かった．

【考察】 予防該当群の作業の特徴は，作業の内容では外出を伴う作業の有無や満足度に非該当群と違いがないこと，作業の時間使用ではうまく遂行できなかったと感じる作業の時間が長いことや休息に該当する作業の時間が長いことが特徴であったと考えられた．また，予防該当群の作業は，予防該当群の身体的・心理的・社会環境的側面を反映していたことも明らかとなった．したがって，予防該当者の作業を評価することは，身体的・心理的・社会環境的側面の評価と同様に重要であり，作業を評価ができる作業療法士は介護予防事業に必要であると思われた．

【結論】 本研究では，予防該当者の作業内容や時間使用の特徴を調査し，外出を伴う作業の有無や満足度には特徴がないこと，うまく遂行できなかったと感じる作業の時間が長いことや価値が低い休息に該当する作業の時間が長いことを明らかにすることができた．今後は，規模や地域を拡大した調査や縦断研究を行うことで予防該当者の作業の問題を明らかにし，作業療法士による評価・介入の必要性をさらに検討したい．